

開催講演・ワークショップ

高橋 博美

はじめに

本報告は、2016年度神戸学院大学教育開発助成金で開催した講演会及びワークショップ（以下、WSと表記）の記録である。多文化共生社会でのコミュニケーションスキルやあり方を体験を通して考える「汎用的なコミュニケーションスキルを考える」シリーズとして企画した。グローバル・コミュニケーション学部で開講しているジェネリックスキル・トレーニング授業の内容充実と担当者研修も兼ね開催した会であるが、参加者の多様性を担保すべく、一般にも広く開放する形での開催とした。

1. 講演会

第1回講演は佐藤秀明氏（NPO ここねっと発達支援センター理事長、子どもの権利条約日本副代表、特別支援連携協議会委員長、他）を講師としてお招きし、開催した。

【講演タイトル】「発達障がい」の子供たちからのメッセージ～理解を深め支援について考えよう～

【開催日時】 2016年10月22日(土) 13:00～16:30

【場所】 ポーアイキャンパスD号館3階アクティブスタジオ

平成28年4月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され、学校現場においても「合理的配慮」の提供が決められた。本授業では、ソーシャルインクルージョンを試行する際に方途として組み込まれることの多いアート活動・身体活動も取り入れている。本授業の特色や汎用性・応用性を考え、学校教育に求められる「合理的配慮」の理解を深めるべく佐藤氏に講演をお願いした。また、本学部でも教職養成が行われており、必要な知見としても位置付けられた。

講演はWSを挟む形式で開催された。告知が間際になったにも関わらず、市議会議員、特別支援学校教員、小中学校教員、社会福祉従事者、及び本学学生等15名の参加者が集った。机上の理論に止まらない、現場からの示唆・教示として、参加者からは好評を得、終了予定時間を1時間延長する活気溢れる会となった。会の最後には、講演後熊本の震災被害を受けた子供たちの支援へ向う佐藤氏からの提案を受け、子供たちへのメッセージも送った。WS部を除いた講演内容抄録を示す。

【内容抄録】

発達支援が必要な子供達や青年たちについて良い情報とネットワークを作り支援していく必要がある。この講演会は、発達支援が必要な子供たちに特化した取り組み、私たちが実践から導きだした「合理的配慮」について考える機会としたい。

20年前から、インクルーシブ教育システム作りをアメリカでは行っている。日本でも「インクルーシブ」という言葉をよく聞くようになった。しかし、日本の多くはインデクレート教育システムである。普通学級で学ぶ子供達に障害のある子供達をいれるというのが「インデクレート」である。「インクルーシブ」は障害のある子もいない子もいる状態でシステムを作る。ただし、この中に支援を必要としている子供がいれば、必要に応じて自分の学びやすい環境と、教科を委ねる。日本で言えば、LT教室や、通級指導教室の類に当たる。インクルーシブ教育システムを考えたい。そこで必要になるのが、「支援」である。

発達支援が必要な子供達は、大概、自分が聞いて欲しいことを問う。つまり、自分の中で既に答えを持っていることが多い。従って、「異なる配慮」をされた子供たちは違うどこかへ行ってしまう。教員の「配慮」が本当に「配慮」となっているのか。異なる反応が出たときに、教員が行っている「配慮」が伝わらなかったときには「強制」となることもある。

発達障がいとされる子供たちも特性がある。強い個性を特性に変えていくことはできる。一人一人の子をサポートするとは、その子の背景と環境と対応を分析する、情報を入手する。そして理解へ。理解の仕方も、聞き取りや発達検査、動作方法、認知高度療法、様々な試みをし、その子のよさに繋がる、その子のよさを使い支援できるような手がかりを見つけていくことが最善となる。個人でできないことは、支援支部といった支援を頼ればよい。大学でも、私たちと協力し、支援システムを作り、さらに次へと繋げていっているところも既にある。

「配慮」は特別なことではない。その子供が、どういった困難を抱えてここまで来たのか、という物語をなぞる。どのような環境に置かれ、周りはどのような対応をしていたのか。周りの対応が環境調整に繋がっていく。これまでの環境や支援を知らずに支援はできない。

「配慮」とは、支援が必要な子供たちに対して向き合う。そうして、できる配慮を提示し、どれを選択するか、確認をする。子供たちは、自分でその中から選ぶ。配慮をされていることがわかる子供は、支援を素直に受ける。その支援の結果が良ければ、さらに次へと繋がっていく。しかし、配慮していることもわからないままの支援は、不安も呼ぶ。「合理的な配慮」というときに、一番大切となるのは、支援する者と、支援される者で配慮しているのが相手に伝わっているのかどうかである。

基本的には言葉で伝えなくてはならないが、言葉だけでは上手く伝わらないときは、一緒に驚く、一緒に感動する、一緒に発見する。「驚き感動発見」と呼んでいるが、それも踏まえて子供に対してどのような配慮をしていくのかを伝えていくということが求められる。「理解する・配慮する・支援する」。「合理的な配慮」というときに合理性とはコストや、施設の問題だけを指すのではない。

自分のよさを知り、互いに認め合う活動を通して子供は成長する。「自分のよさを知り、互いに認め合う活動を私たちと一緒にしてほしい」、これが子供達からのメッセージである。

2. ワークショップ

第1回講師には新井英夫氏（体奏家・ダンスアーティスト・国立音楽大学非常勤講師）、第2回には森井淳氏（ダンサー・近畿大学非常勤講師）をお招きしWSを開催した。

両氏ともに、身体に照準を置いたWS講師の経験を豊富に持つ。身体を扱うWSは他者との接触を伴ったり、と注意を要する。言語ではないところで成立するノンバーバルなコミュニケーションを考えるとともに、ファシリテーションやワークの進め方を教示いただくことを目的とし、WSをお願いした。

【第1回 WS タイトル】 ほぐす・つながる・つくる～からだを奏でる・非言語コミュニケーションと表現のワークショップ

【開催日時】 2017年1月8日(土) 13:00～16:00

【場所】 ポーアイキャンパス D号館2階 WSスタジオ

【活動報告】

新井氏は、他者理解や社会包摂が求められる現場で多くのWSを開催している。今回のWSは、自然の原理にあった動きを基にする野口体操に原点も持つものであった。新井氏が本WSに寄せて送ってくださった言葉は以下のものであった。

「余計な「力を抜いて」からだのささやかな声に耳を傾けることから始めてみたいと思います。(中略)「力を抜く(スキマをつくる・間を空ける・「する」でなく「なる」…)」ことは決して消極的な態度ではなく、ささやかな違いを感覚したり、他力(モノ・コト・ヒト、たとえば重力)と協働するための積極的な受容や寛容や信頼のあり方だと私は感じています。(中略)あるひとつの基準に向かって右肩上がりに「できる」を競い合うのではなく、「できない」ことを、それぞれの



違いを、まるごとそのまま肯定的にからだの実感から認め合う、そしてバラつきや違いがあるからこそ豊かな「対話」や「表現」が生まれる…、ワークショップの現場ではそんなことを私はいつも思い描いています。多様な皆さんの参加をお待ちしております！」

この呼びかけに、小中高大・特別支援、と様々な学校の教員、福祉関係、企業人、本学学生といった年齢も幅のある参加

者約 20 人が集った。WS は終始、笑い声の聞こえるものとなり、参加者から「楽しかった」「もう少し受けたかった」「初対面ながらもお互いを思いやることができたのがすごいと思った」などの感想が寄せられた。参加した学生から寄せられた感想も報告として載せる。

今回の WS を通し、非言語・言語によるコミュニケーションは同等の重要性があると感じました。ポリ大膜を使用したワークがとくに印象的で、膜を広げ張った状態を“筋肉が緊張している状態”、反対は“緩んでいる状態”を表します。膜の一端から対角方向へ波（意思伝達）を送ったとき、“緩んだ状態”は、波が伝わりやすく、両者がリラックスした状態であると伝達しやすいことを表現していました。私はコミュニケーションとは、言葉を使って意見を交わし理解を深めるものだと思っていました。しかし、それだけでは不十分だと気づくことができました。非言語による伝達では、意見だけでなく人間性が見えていき、信頼が生まれます。実際に、私は今回初対面であった参加者の方で、年齢に問わず安心して話すことができ、変化を感じることができました。

(グローバル・コミュニケーション学部 1 年 片山晏里)

【第2回 WS タイトル】 Movement Communication WS

【開催日時】 2017 年 3 月 4 日(土) 11:00 ~ 16:30

【場所】 ポーアイキャンパス D 号館 2 階 WS スタジオ

【活動報告】

森井氏は学生時代にイギリスへ留学し、国内外で活躍するプロダンサーである。小中高大様々な場所で表現や身体を扱った WS も開催している。森井氏には、ムーブメントに焦点を置いて WS を準備いただいた。「カラダを使って遊び感覚のように自分と自分以外の人とも会話する」。森井氏が設定した WS のテーマである。

参加者は約 15 名。今回は本学の教職員からも参加があった。また、東京、滋賀と遠方からも足を運んでいただいた。参加者からは次のような感想が寄せられた。

「久しぶりに全身で遊んで楽しかった!」「全身で感じて、視界を広くすること・内側から出てくるものを体感して、自分のコミュニケーションを振り返った」「まだもう少し受けたい」

覆っていた諸々が取れ、本来の自分そのものに出会う。自分の中から出てくるものと外に出される表現を一致させていく。そうして、他者と出会っていく。身体知から汎用的なコミュニケーションを考える機会となった。



おわりに

1回の講演会と2回のWSを開催した。回数を重ねるに従い、多様なバックボーンを持つメンバーが集うようになっていった。WSをきっかけとし、その後、プロジェクトを立ち上げる話も出ている。参加した学生は、学外の多様な大人と出会うことにもなり、こちらも外部のプロジェクトへの参加の機会を得たようである。

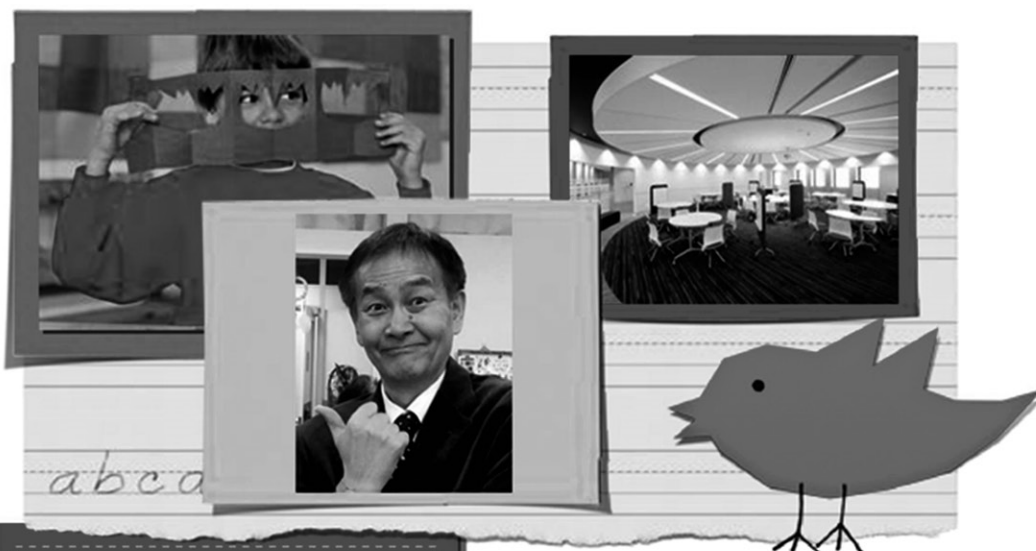
佐藤氏の講演において「自分のよさをいかして、互いに高めあう活動をしたいと思ってる子供たちは数多くいる。自分のよさを知り、互いに認め合う活動は基本となる。それが、自分の中で、前向きになれば、自分のよさを活かして、互いに高めあう活動を求めてくる。それに応えることができるかどうかだ」といったメッセージが我々に送られた。ジェネリックスキル・トレーニングは多文化共生社会の中でのコミュニケーションスキル育成を目標としている。今回の講演、及びWSは、社会への視野を広げ、多文化共生社会でのコミュニケーションスキルやあり方を考えるステップとして大きな開催意義があったと考えている。また、結果として、大学の果たす地域貢献のあり方を考える場ともなった。

報告資料 1. 佐藤氏講演会案内

シリーズ、汎用的なコミュニケーションスキルを考える

「発達障がい」の 子供たちからのメッセージ

～ 理解を深め支援について考えよう ～



講演 佐藤秀明先生

宮城県中学・高校・支援学校教育、宮城教育大学教育学部教員を経て NPO ここねっと発達支援センター理事長。他、子どもの権利条約日本副代表、特別支援連携協議会委員長、教育研究専門カウンセラー等を兼任。

メッセージ：

発達障がいを理解することと、発達障がいのあることも理解することの違いを知ることができると、支援は功を奏します…

また、効果的な支援を展開するためには、発達障がいのあることも理解することの次に、配慮することが、実はとても大切なことなのです…

今回は、多くの取り組みの中からワークを取り入れて、より実践的な発達障がいの理解～配慮～支援のお話をさせていただきます。

開催日時・場所

日時 2016年10月22日(土)
13:00～16:00

(終了は30分ほど余裕をもってご参加ください)

場所 神戸学院大学 D号館3階
アクティブスタジオ

参加費 500円 (子供たちの震災後支援プロジェクトに寄付いたします)

申込先：<https://senseiportal.com/events/38709?from=widget>
<http://kokucheese.com/event/index/428167>

問い合わせ先：神戸学院大学グローバルコミュニケーション学部高橋研究室 tak-pomei@gc.kobegakuin.ac.jp

※ 本講演は教育改革助成金事業の助成によります

報告資料2. 新井氏 WS 案内

シリーズ 汎用的なコミュニケーションスキルを考える

ほぐす・つながる・つくる

～からだを奏でる・非言語コミュニケーションと表現のワークショップ～

多文化が共生する社会。そこで求められるコミュニケーションスキルやありようとはどのようなものでしょうか。今回は、他者理解や社会包摂が求められる現場で実践されている新井英夫氏をお招きし、非言語から考えていきたいと思ひます。新井氏には、保育園、小中学校(通常級・特別支援級)～大学、フリースクール、高齢者施設、福祉作業所、公共ホールなどで、年齢や障がいの有無を越えて、幅広い対象に向けて実施されてきた内容をご紹介します。

「力を抜くというチカラ」

こんにちは、体奏家・ダンスアーティストの新井英夫です。

今回のワークショップでは、まずは、余計な「力を抜いて」からだのささやかな声に耳を傾けることから始めてみたいと思ひます。そして集まったみなさんと、個々がてんでんばらばらの自由のまま、ゆるやかにつながり、お互いに想ってもみなかった「おもしろいこと」「うつくしいこと」「ありがたいこと」が創造できればいいなあと願っています。

「力を抜く(スキマをつくる・間を空ける・「する」でなく「なる」…)」ことは決して消極的な態度ではなく、ささやかな違いを感覚したり、他力(モノ・コト・ヒト、たとえば重力)と協働するための積極的な受容や寛容や信頼のあり方だと私は感じています。超高齢社会を迎え、だれもが自他の老いや衰えを受け容れて生きていかななくてはなりません。また生涯を通じて病と無縁の人もいないでしょう。障害や生きづらさについても同じことが言えると思ひます。あるひとつの基準に向かって右肩上がりに「できる」を競い合うのではなく、「できない」ことを、それぞれの違いを、まるごとそのまま肯定的にからだの実感から認め合う、そしてバラつきや違いがあるからこそ豊かな「対話」や「表現」が生まれる…、ワークショップの現場ではそんなことを私はいつも想ひ描いています。多様な皆さんの参加をお待ちしております!

日時：2017年1月8日(日) 13:00～16:00
場所：神戸学院大学ポーアイキャンパス D号館2階WSスタジオ
<http://www.kobegakuin.ac.jp/access/portisland.html>

新井英夫 プロフィール

自然に学び力を抜く身体メソッド「野口体操」を創始者・野口三千三氏から学び深い影響を受ける。野外劇などマチと関わる演劇活動を経て独学でダンスへ。1997年にDANCE-LABO KARADAKARAを創立主宰、現在まで体奏家・ダンスアーティストとして国内外で活動中。音楽家・美術家など他ジャンルアーティストとの国際共同創作も多数。公演活動との両輪として、障がいのある方・乳幼児から高齢者の方まで幅広い対象に向けた「ほぐす・つながる・つくる」からだのワークショップを教育・福祉・社会包摂に関わる現場で展開中。国立音楽大学非常勤講師。料理と落語好き。

<http://blog.goo.ne.jp/karadakara>



撮影:森木隆之

Jan.
8

Arai Hideo Dance WS

問い合わせ先：神戸学院大学グローバルコミュニケーション学部事務室
078-974-1551

(高橋研究室 tak-pomei@gc.kobegakuin.ac.jp)

申し込み：こくちーず：<http://kokucheese.com/event/index/439869/senseipotal> ; <https://senseipotal.com/events/39287>

※当日は動きやすい恰好でご参加ください。本WSは教育改革助成金事業の助成により開催されます。

報告資料3. 森井氏 WS 案内

シリーズ 汎用的なコミュニケーションスキルを考える

多文化共生社会で求められるコミュニケーションスキルやあり方とはどんなものでしょうか。シリーズ3回目となる今回は、森井淳さんを講師にお招きし、Movement から考えていきます。Movement で互いに見合い、繋がり合う世界。ただそこにいる、それだけで人それぞれの持つ個性が際立って見える。みな違って当たり前が厳然とした事実として立ち現れる、そんな体験ができるかもしれません。

便利な世の中になり、簡単に色々なことが出来るようになってきましたが、便利になればなるほどカラダを使うことも減り、カラダを使ってのコミュニケーションもすごく減ってしまったように思います。

カラダを使って遊び感覚のように自分と自分以外の人とも会話してみませんか？

森井淳

Movement Communication WS

JUN MORII

日時：2017年3月4日(土) 11:00~16:30

場所：神戸学院大学 D号館 2階 WS スタジオ ※動きやすい恰好でお越しください

問い合わせ先：神戸学院大学グローバルコミュニケーション学部高橋研究室
(078) 974-1551 (代表)

申し込み先：
こくちーズ：
<http://kokucheese.com/event/index/453560/>
senseiportal：
<https://senseiportal.com/events/40257>

※本WSは教育改革助成金事業によります。



講師 森井淳
j.a.m. Dance Theatre

近畿大学在学中、ダンスを始める。卒業後渡英。LABAN CENTRE LONDONにてProfessional Diploma in Dance Studies取得後、同センターの「Transitions Dance Company 2000」に所属。英国内外のツアーにてパフォーマンス&計40カ所近くの小中学校、大学などを含む様々な場所にてワークショップを行う。以後も国内外でダンサー・振付・演出と幅広く活躍。現在、関西を中心にコンテンポラリーダンステクニッククラスやワークショップの指導、海外講師のアシスタントなどアウトリーチ活動にも積極的に取り組む。WSでは、自分の足で立ち、考え、周りの人やその場に対してどう表現し、コミュニケーションをとるのかということをお大切に。通称ちよん。